



THE FUKUOKA  
ASIAN CULTURE PRIZES

**THE 17th  
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES 2006**

---

2006年(第17回)福岡アジア文化賞

# 大賞

---

## GRAND PRIZE



モオ・イエン  
莫言

MO Yan

作家

Writer

1955年2月17日生

Born February 17, 1955

中国

China



## 略 歴

- 1955 中国、山東省高密県ガオミーに生まれる  
1969 小学校五年生のとき文化大革命で中退。農業の手伝いや工場で働く  
1976 人民解放軍入隊。軍の中で兵士、教員などを経て文芸創作員となる  
1981 処女作『春夜雨霏霏』チュンイーユフエイフエイで創作開始  
1984 - 86 人民解放軍芸術学院文学系  
1985 『透明な人參』で文壇デビュー  
1986 人民解放軍総参謀部文化部  
1987 『赤い高粱一族』コーリヤン第4回全国中編小説賞。88年、映画化された作品『紅いコーリヤン』が第38回ベルリン国際映画祭金熊賞  
1988 『白い犬とブランコ』台湾聯合文学賞  
1989 北京師範大学魯迅文学院文芸研究科。91年、文芸学修士号取得  
1996 『豊乳肥臀』ほうにゅうひでん大家文学賞  
1997 軍籍を離れ、新聞社「檢察日報」に入社。以後、創作に専念する  
2002 『白檀の刑』ていあん第1回二十一世紀鼎鈞双年文学賞  
2004 フランス政府文化芸術勲章シュバリエ章  
イタリア、第30回国際ノーノ文学賞  
2005 香港公開大学名誉文学博士号

## 主な著作

- 『赤い高粱一族』解放軍文芸出版社、北京、1987 [邦訳:所収『現代中国文学選集』第6巻, 徳間書店, 1989 / 『現代中国文学選集』第12巻, 徳間書店, 1990]  
『天堂ニンニクの芽騒動』作家出版社、北京、1988  
『酒国』しゅこく湖南文芸出版社、長沙、1993 [邦訳:岩波書店, 1996]  
『豊乳肥臀』作家出版社、北京、1995 [邦訳:平凡社, 1999]  
『白檀の刑』作家出版社、北京、2001 [邦訳:中央公論新社, 2003]  
『四十一炮』よんじゅういっぽう春風文芸出版社、瀋陽、2003 [邦訳:中央公論新社, 2006]

### <中・短編作品>

- 『透明な人參』「花束を抱く女」 [邦訳:所収『花束を抱く女』JICC出版局, 1992]  
『至福のとき』ひこく「飛蝗」 [邦訳:所収『至福のとき』平凡社, 2002]  
『白い犬とブランコ』「涸れた河」 [邦訳:所収『白い犬とブランコ』日本放送出版協会, 2003]

### <作品集>

- 『莫言文集』(全5巻)作家出版社、北京、1994-96  
『莫言散文』浙江文芸出版社、杭州、2000  
『莫言文集』(全12巻)当代世界出版社、北京、2004

※邦訳はすべて東京にて出版

※多くの作品は、イタリア語、英語、オランダ語、韓国語、ギリシア語、スウェーデン語、スペイン語、ドイツ語、ノルウェー語、フランス語、ベトナム語、ヘブライ語、ポーランド語などに翻訳されている。

### \*\*\* 贈賞理由 \*\*\*

莫言氏は現代中国文学を代表する作家である。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた作品は数多くの国々で翻訳されている。その作品はアジアの文学を未来に牽引するものであり、現代中国文学のみならず、アジアそして世界の文学の旗手となっている。

1955年、中国山東省高密<sup>ガオミ</sup>県の農民の子として生まれた莫言氏は、文化大革命により小学校を中退。牛飼いや農業手伝い、工場の臨時工などを経て、中国人民解放軍に入隊。その後、1980年代に執筆活動を始め、作家として文壇デビューする。同氏が自らのなかに見出し、一貫して描き続けているテーマは、中国の貧しい農村とそこに生きる人々の生である。同氏は、中国の伝統的な語り物文芸の表現と、西欧の現代文学に由来する前衛的方法を融合することによって、独自の作品世界を生み出し続けている。

1987年に発表した『赤い高粱<sup>コーリャン</sup>一族』は、抗日戦争期の農村地帯を舞台とした作品である。同作品は張芸謀<sup>チャン・イーモウ</sup>監督によって映画化され、ベルリン国際映画祭金熊賞を受賞。中国の大地に根差した作品が世界中から注目を受けた。

続いて『酒国<sup>シヨク</sup>』などの長編小説を発表し、現代中国文学界の最先端に躍り出ると同時に、数々の作品は英語、韓国語、スペイン語、ドイツ語、日本語、フランス語、ベトナム語などに翻訳され、国際的な作家として認知されることになった。

莫言氏は西欧的な小説の模倣ではなく、中国という現実<sup>シヨク</sup>に足を踏まえた小説の創造を主張する。「あとを追いかけるだけでは意味がない。皆が西に行くなら私は東に行く」という同氏の言葉は、単に中国文学を主導するだけでなく、ともすれば西欧近代文学の圧倒的な影響や過去の歴史と伝統の重みに拘束されるアジアの文学を、未来へと牽引する気概をものがたっている。また、何よりも、草深い農村地帯である高密県という故郷を、幻想的な文学空間に変換することによって、文学的宇宙の創造に成功している作品は、中国の風土及び文化や歴史に根差した世界を描くことこそが、地域的でありながら国際的であり、世界文学に通じるものであることを示している。

中国の大地が生み出した莫言氏は、文学を通して、文化が持つ豊かさや多様性、そして人間社会の複雑さや可能性を示し、アジアから世界へと広がる道を切り開き、アジアの文化の意義を世界に示す存在であり、真に「福岡アジア文化賞-大賞」にふさわしい。



# 学術研究賞

---

## ACADEMIC PRIZE



シャグダリン・ビラ

国際モンゴル学会事務局長

1927年9月3日生

モンゴル国

Shagdaryn BIRA

General Secretary, International Association  
for Mongol Studies

Born September 3, 1927

Mongolia

## 2006年(第17回)受賞者

### 略 歴

1927	モンゴル国、ウランバートルに生まれる
1951	モスクワ国立国際関係大学歴史学部卒業
1960	ソ連(現:ロシア)科学アカデミー東洋学研究所博士号候補(歴史科学)
1972	同研究所博士号
1973 - 81	モンゴル科学アカデミー副総裁
1985 - 87	ソ連科学アカデミー東洋学研究所客員教授
1987 -	国際モンゴル学会事務局長
1988	フランス国立社会科学高等研究院客員教授
1991	インド歴史研究協会客員教授
1992 - 93	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所客員教授
1996	モンゴル国・科学功労者(最高章)
1997	インド文化国際アカデミー名誉会員
2001	モスクワ国立国際関係大学名誉博士
2002	モンゴル国・国家勲章 英国・アイルランド王立アジア協会デニス・サイナー・メダル受賞
2006	ユネスコ60周年記念メダル受賞

### 主な著作

- 『17～19世紀のチベット語によるモンゴル歴史叙述』[ロシア語]モンゴル国立出版, 1960[英語版:米国モンゴル協会, インディアナ, 1970]
- 『モンゴルの歴史・文化・歴史編纂における諸問題』(論文集1)[モンゴル語・英語・ロシア語], 1977
- 『モンゴルの歴史・文化・歴史編纂の研究』(論文集2, 3)[モンゴル語・英語・ロシア語]東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京, 1994/国際モンゴル学会、モンゴル科学アカデミー歴史学研究所、遊牧文明研究所, 2001
- 『13～17世紀におけるモンゴルの歴史編纂』[ロシア語]ソ連科学アカデミー東洋学研究所、モンゴル科学アカデミー歴史学研究所、ナウカ出版東洋文献出版所, モスクワ, 1978[英語版:『1200～1700年におけるモンゴルの歴史編纂』(改訂版)ウエスタン・ワシントン大学東アジア研究所, ワシントン, 2002]
- 『現代モンゴル語によるダンディンのカーヴィヤダルシャ(「詩鑑」)と解説』(共著), 1982
- 『モンゴル文化』[蒙文]民族出版社, 北京, 1992
- 『モンゴルと日本の仏教信仰と政治観と伝統の比較研究』[モンゴル語, 英文要旨付](所収『アジア・アフリカ言語文化研究』48・49合併号, 創立30周年記念号2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京, 1995)
- 『12～13世紀のモンゴル人とモンゴル国家』[英語](所収『中央アジア文明史』Vol.4-1, ユネスコ出版, パリ, 1998)
- 『モンゴルの辞書編纂と歴史編纂』[英語](所収『中央アジア文明史』Vol.5, ユネスコ出版, パリ, 2003)
- 『モンゴル人のテングリ信仰と現代のグローバリズム』[英語](所収『王立アジア協会ジャーナル』第3号, Vol.14-1, ケンブリッジ大学出版, ケンブリッジ, 2004)

※出版社の表記のないものはモンゴル科学アカデミー出版、出版地の表記のないものはウランバートルにて出版



### 贈賞理由

シャグダリン・ビラ氏は、モンゴル国を代表する歴史学者として、国際的に高く評価されている。同氏は、歴史学を中心にモンゴルにかかわる文化・宗教・言語・古典文献などについて幅広く研究し、さらにインド・チベットをも包み込んだ多角的かつ総合的な分析や考察へと視野を広げていった。それらを通じて、遊牧民社会に独特の世界像をモンゴル人みずからの視線にもとづいて体系的に解明した。

ビラ氏は、モスクワの国立国際関係大学歴史学部を卒業後、帰国してモンゴル科学アカデミー歴史学研究所の研究員となり、本格的な研究生活に入った。1972年、ソ連(現ロシア)科学アカデミー東洋学研究所より博士号を取得するいっぽう、同年にはモンゴル科学アカデミーの正会員、ついで翌年には副総裁となり、モンゴルの学術界で次第に重きをなした。その後、ロシア、フランス、インド、日本などの大学・研究機関で客員教授として招聘され、またモンゴル、チベット、インドに関連する各種の国際学会で多面的な活動を展開した。さらに、1987年に国際モンゴル学会が設立されると、当初より一貫して事務局長として、モンゴル研究の国際的な普及や組織化に中心的な役割をはたしてきた。

ビラ氏の研究は、13～14世紀に人類史上で最大の版図を実現したモンゴル帝国時代に始まり、さまざまな歴史的変動を重ねて、遂に21世紀の現在にいたったモンゴル人たちの道りを総体として眺め渡すものといっている。とりわけ、『13～17世紀におけるモンゴルの歴史編纂』をはじめとする一連の著作で示されたモンゴル独自の伝統文化の形成と展開に関する的確にして深い洞察は、日本を含めた世界各国の関連研究者に大きな刺激を与え続けている。

このように、歴史学を中心にモンゴル研究全般にわたって大きな業績をあげ、世界規模での研究の組織化や普及にもいちじるしい貢献をはたしてきたビラ氏は、「福岡アジア文化賞-学術研究賞」の受賞者として真にふさわしいといえる。

学術研究賞  
ACADEMIC PRIZE



はました たけし  
濱下 武志

龍谷大学国際文化学部教授

1943年11月20日生

日 本

HAMASHITA Takeshi

Professor, Faculty of International  
Communication, Ryukoku University

Born November 20, 1943

Japan



## 略 歴

- 1943 静岡市に生まれる  
1972 東京大学文学部東洋史学科卒業  
1974 東京大学大学院人文科学研究科東洋史専攻修士課程修了、同博士課程入学  
1976 - 77 香港大学アジア研究センター研究助手  
1977 - 79 財団法人東洋文庫奨励研究員  
1978 東京大学大学院博士課程退学  
1979 一橋大学経済学部専任講師(81年、助教授)  
1982 東京大学東洋文化研究所助教授(88-04年、教授)  
1985 フランス国立社会科学高等研究院主任研究員  
1990 - 沖縄県教育委員会『歴代寶案』編集委員  
1991 第3回アジア・太平洋賞大賞  
1991 - 92 アメリカ、コーネル大学東アジアプログラム客員教授  
1992 香港大学歴史学部客員教授  
1996 - 98 東京大学東洋文化研究所所長  
1999 - 2000 シンガポール国立大学人文社会科学部客員教授  
2000 - 06 京都大学東南アジア研究センター(現:研究所)教授  
2001 - 中国、中山大学歴史学部客員教授  
2004 東京大学名誉教授  
2006 - 龍谷大学国際文化学部教授

## 主な著作

- 『中国近代経済史研究-清末海関財政と開港場市場圏』東京大学東洋文化研究所, 1989  
『近代中国の国際的契機-朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会, 1990  
『香港-アジアのネットワーク都市』[ちくま新書079]筑摩書房, 1996  
『朝貢システムと近代アジア』岩波書店, 1997  
『地域の世界史11 支配の地域史』(共編著)山川出版社, 2000  
『沖縄入門-アジアをつなぐ海域構想』[ちくま新書249]筑摩書房, 2000  
『海のアジア5 越境するネットワーク』(共編著)岩波書店, 2001  
『華僑金融ネットワークと韓国』[英語](所収『近代アジアにおける商業ネットワーク』ルートリッジ・カーゾン社, ロンドン, 2001)  
『朝貢と条約-交渉の時代における海のアジアと条約港ネットワーク:1800-1900年』[英語](所収『東アジアの復活』(共編著)ルートリッジ社, ロンドン, 2003)  
『交差するインド系ネットワークと華人系ネットワーク-本国送金システムの比較研究』(所収『現代南アジア6』東京大学出版会, 2003)

※出版地の記載のないものは、すべて東京にて出版

### \*\*\* 贈賞理由 \*\*\*

濱下武志氏は、東アジア近代史の分野で顕著な業績を挙げただけではなく、「地域としてのアジア歴史像」を斬新な方法と視角で分析した歴史学者である。西欧からみた世界史認識や、国民国家中心のアジア歴史観を大きく塗り替え、国内外で高い評価を獲得している。

濱下氏は、過去30年間、足しげくアジア地域を訪問し、資料収集、史跡の訪問、現地の人々との語らいに時間をかけてきた。同時に、中国、香港、台湾、韓国、タイ、シンガポール各地の若手歴史研究者の指導と育成にも並々ならぬ精力を注いできた。研究の主な対象は中国であるが、研究テーマは「華人のネットワーク」や「朝貢貿易体制」といったように、国境を超えていく。伝統的な「東洋史」が目指してきた特定の国の歴史(ナショナル・ヒストリー)ではなく、中国や日本を含むアジアを、地方 = local、地域 = region、広域地域 = area、の三つのレベルで捉えなおす、まったく新しいアジア歴史像を構築してきた。

中国の海関(税関)に関する詳細な研究は、中国・西欧の貿易関係史だけではなく、北京の清朝政府と華南地域の経済活動の間の「中央-周辺」のダイナミックな関係をも視野に収めた斬新な研究であった。また、華僑・華人の交易・移住・送金に関する研究は、中国と東南アジアの間に形成されたユニークな地域秩序(華夷秩序と朝貢貿易)の研究に結実する。この研究は、国民国家の形成を軸とする従来の世界史認識、つまり、西欧に追いつく試み(近代化論)や、西欧の植民地支配に抵抗する姿(ナショナリズム論)によってもっぱらアジアを捉えてきた既存の歴史像を、地域の内部から捉えなおす画期的な業績であり、1991年度のアジア・太平洋賞大賞を受賞した。

濱下氏が関心を寄せるのは、国家間関係や首都同士の交流ではなく、アジア各地の移民の生活実態や彼らの心情であり、香港のネットワーク都市としての発展であり、そして、鎖国時代の日本と中国、台湾、東南アジアの間の交易の中継基地となった沖縄(琉球王国)の歴史である。とくに、沖縄県教育委員会による琉球王府の外交文書『歴代寶案』<sup>れきだいほうあん</sup>の編集作業に長年にわたって協力した功績は大きく、海域アジアの地域間交流史の研究に新しいページをひらいた。また、交易や移民の歴史をとりあげるにあたって、アジア地域の歴史研究者と連携して共同研究を立ち上げ、ネットワーク作りと学術交流にも貢献してきた。

このように、濱下氏の研究と活動はまことにスケールが大きく、アジア全体を見すえた地域像の構築に先駆的役割を果たしてきたと評価できるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞-学術研究賞」にふさわしい業績といえる。



# 芸術・文化賞

---

## ARTS AND CULTURE PRIZE



アクシ・ムフティ

Uxi MUFTI

ローク・ヴィルサ所長

Chief Executive, Lok Virsa

1941年3月24日生

Born March 24, 1941

パキスタン

Pakistan

## 略 歴

- 1941 パキスタン、パンジャーブ州、ラーホールに生まれる
- 1965 ラーワルピンディー、ゴードン大学卒業(社会心理学)
- 1966 ラーホール、ガバメントカレッジ大学修士号(心理学)
- 1968 チェコスロバキア(現チェコ)、カレル大学博士号(社会学思想)
- 1970 パキスタン・ユネスコ国内委員会、パキスタン流行音楽調査パキスタン代表
- 1971 - 79 パキスタンテレビの人気民俗音楽番組「ロック・タマーシャー」プロデューサー兼ディレクター
- 1973 パキスタン芸術評議会民間伝承・民俗芸術部門上級部局長
- 1974 - ロック・ヴィルサ(国立民俗伝統遺産研究所)創設、所長
- 1976 全国民俗文化祭「ロック・メラー」創設。以後、年一回継続開催
- 1978 - 90 東京、ユネスコアジア文化センター、視聴覚教材共同制作事業パキスタン代表
- 1989 パキスタンの文化と社会を紹介する音楽映像作品『ザ・サーカラマ・ボックス』でアジア太平洋放送連合賞
- 1992 - 96 ユネスコ認定NGO「世界工芸評議会」アジア太平洋名誉会長
- 1994 - 95 ジュネーブ、アーガー・ハーン基金によるバルティット城博物館建設プロジェクト顧問
- 1994 パキスタン政府文化勲章
- 1995 キルギスタン、「英雄叙事詩マナス1000年祭」ユネスコ専門家
- 1996 - 98 ロック・ヴィルサにて、国際交流基金の公募助成プログラム「中央アジア及びインダス渓谷における無形文化財の記録・保存」を実施
- 2002 - 04 国立民族伝統遺産博物館建設プロジェクト総括責任者
- 2005 - 国立記念博物館建設プロジェクト総括責任者

## 主な出版・制作

- 『パキスタン民俗学入門』[英語, ウルドゥー語] ロック・ヴィルサ出版局, イスラームバード, 1976
- 『口頭伝承と社会発展』[英語] (所収『社会発展における芸術と文学の役割』学習院大学東洋文化研究所, 東京, 1979)
- 『蛇使いの音楽』[CD-ROM] オリビアレコード, ニューヨーク, 1987
- 『コンピューター検索システムとアジア伝統文化の記録』[英語] ロック・ヴィルサ出版局, イスラームバード, 1988
- 『アジア太平洋の祭り』[ビデオ] (共編) ユネスコアジア文化センター, 東京, 1988
- 『アジア太平洋の民謡』[カセットテープ] (共編) ユネスコアジア文化センター, 東京, 1990
- 『パキスタン民俗大辞典』全5巻(共編) [ウルドゥー語] ロック・ヴィルサ出版局, イスラームバード, 2003

※スーフィー詩歌と音楽アルバムに関する書籍30冊の主任編集員(ロック・ヴィルサ出版局及びシャーリーマールレコード社, イスラームバード, 1978-90)

※パキスタン民俗伝統音楽のレコード20枚以上の制作者(EMIパキスタン社, イスラームバード)



### \*\*\* 贈賞理由 \*\*\*

アクシ・ムフティ氏は、パキスタンに生きる有形・無形の文化伝統の収集・保管・記録保存ならびに普及活動を行う「ローク・ヴィルサ(国立民俗伝統遺産研究所)」の創設者であり、パキスタンを代表する民俗文化保存の専門家である。同機関を長年にわたり主導することにより、パキスタン文化の基層を実証的に探求し続け、民俗文化の保存・活用・普及の意義と重要性を同国内はもとより、世界に広く発信した功績は大きい。

ムフティ氏は国内で心理学を学んだ後、留学先のチェコスロバキア(現チェコ)で西洋哲学を研究したが、その過程で母国パキスタンの詩歌、文学、音楽などに何世紀にもおよぶ先人たちの叡智が溢れていると確信する。帰国後、パキスタン国家が政治的なナショナリズムを重視していた折に、文化的ナショナリズムを基盤にすえた自国の将来像を描いて、1974年に「ローク・ヴィルサ」を創設、初代所長を務めて以来、現在まで主導的な役割を果たしてきた。同機関を起点に調査研究や保存活動に尽力する一方、民俗文化に対する国民の意識向上を図るため、多年にわたり民俗音楽番組を制作した。さらには、消滅の危機に瀕する伝統芸能を復興させ、地域の工芸などを育成するため、全国の芸術家・工芸家が一堂に会する民俗文化祭の継続的な開催や、地域発展につながる草の根活動を推進するなど多方面での活躍を続けている。

この間、ムフティ氏は30年余にわたり、膨大かつ地道な民俗調査を展開してきた。とりわけパキスタン奥地山間部や農村部での調査成果は世界的にも貴重な記録となっているほか、工芸品などの収集から情報のデータベース化までの一連の作業は、同国における民俗伝統の全貌を知るうえで重要な資料となっている。

2004年には国立民族伝統遺産博物館を完成させ、現在も同国の国立記念博物館建設プロジェクトの総括責任者を務めるなど、パキスタン国内の文化遺産保存の実践者であり続けている。国際的にも、ユネスコをはじめ数多くの国際文化機関との協働作業を展開し、中央アジア・イスラーム諸国を中心にした民俗文化保存活動の主導者としても知られている。

このように、パキスタンを代表する著名な文化指導者として、民俗文化の保存と発展に尽力するのみならず、国際的にイスラーム文化の保存・活用および普及に大きく貢献してきたムフティ氏の活動は、まさしく「福岡アジア文化賞-芸術・文化賞」にふさわしい。



## \*\*\* 授賞式 \*\*\*

日 時：9月14日(木) 18:00~19:40

会 場：福岡国際会議場 メインホール

秋篠宮殿下のご臨席を賜り、大使館関係者、国際交流団体、経済団体、大学関係者、留学生、地域団体及び市民など約1,000名が見守る中、アグネス・チャン氏の司会により、厳かな雰囲気です式典が行われた。

第1部では、まず映像で受賞者の業績を紹介した後、会場からの盛大な拍手に迎えられ受賞者が入場した。その後、主催者代表挨拶、秋篠宮殿下からのお言葉、選考経過報告が行われた後、主催者より各受賞者に賞状とメダルが贈呈された。続いて各受賞者がスピーチを行い、受賞の喜びやアジアの文化に対する考え、市民へのメッセージなどを語った。最後に、福岡インターナショナルスクールの生徒たちから各受賞者へ花束が手渡され、会場は再び大きな拍手に包まれた。ステージ上では受賞者のエスコート役として筑紫女学園大学アジア文化学科の学生たちが和服姿で登場し会場に華を添えた。

第2部では、和やかな雰囲気の中で、4人の受賞者とアグネス・チャン氏との対談が行われた。その後、福岡市民を代表して、福岡大学東アジア地域言語学科の安永秀司氏から受賞者へのお祝いの言葉が贈られた。最後は、アグネス・チャン氏が、会場と一体となって「しあわせの花」を合唱し、授賞式を感動的に締めくくった。



司会／アグネス・チャン氏  
Master of Ceremony: Ms. Agnes Chan





### \*\*\* 受賞者あいさつ \*\*\*



大賞  
莫言

2006年(第17回)福岡アジア文化賞大賞を受賞することができ、誠に光栄に存じます。

福岡アジア文化賞は1990年に設立された当初から、巴金、黒澤明などの著名人の受賞により、アジア各国の文化・芸術界の注目をあびました。その後も、アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績をあげた第一級の方々が表彰されるにつれて、福岡アジア文化賞はアジア地域での地位を高めてきました。このような重要な意義を持つ福岡アジア文化賞を創立した福岡市も、真珠のように輝かしい光を放っています。

私は、この賞を自分と結びつけて考えたことは一度もありませんでした。なぜなら、これまでの素晴らしい受賞者と比べると、私はただ真面目に創作に専念している一人の作家にすぎませんし、私の業績も取るに足りないものばかりだからです。ですから、こんな私が受賞するとの知らせを受けたとき、光栄に思うと同時に恥ずかしくもありました。

固有かつ多様なアジアの文化は、世界の文化の重要な部分を占めており、全人類の共有の財産でもあります。このアジアの文化を継承し、保存し、発展させ、そして創造していくことは、アジアの文化・芸術に携わる人々の神聖な責務なのです。私も今回の受賞を自分自身に対する鞭撻と捉え、これからもっと勇気と真心をもって、自分なりの貢献をしていきたいと思っています。

最後になりますが、福岡アジア文化賞を設立された福岡市と、この賞を支えてこられた福岡市民の皆様、そして世界54か国・地域の約4,000名の推薦委員の方々、審査・選考委員会の委員の方々に心から敬意と感謝を表したいと思います。恭しくかつ謙虚な気持ちで、この栄誉をお受けいたします。

ありがとうございます。

## \*\*\* 受賞者あいさつ \*\*\*



学術研究賞  
シャグダリン・ビラ

この栄えある賞を授与して下さった福岡アジア文化賞委員会ならびに財団法人よかトピア記念国際財団に対し、私の心からの感謝を伝える言葉を見つけることができません。モンゴルの歌姫ナムジリン・ノロウバンザトに続く2人目の受賞者、かつ学術研究賞としてはモンゴル初の受賞者に選んでいただき、本当にうれしく光栄に思います。

この学術研究賞は私一人ではなく、私の国、そしてモンゴル国の研究者達に対する栄誉です。私に大いなる刺激とエネルギーを与えてくれ、更なる若さと熱意を与えてくれました。モンゴルには「生きていれば必ず良いことがある」という言い伝えがありますが、その通りになりました。

モンゴルと他の国、特に日本との関係における新時代の到来をこの目で見る事ができたことを、ことのほかうれしく思います。

クビライ・カアンが13世紀の終わりに日本の南の島を侵略してから現在まで、何世紀もの間、両国の接触が深まることはありませんでした。しかし、モンゴルと日本の今の世代は、海と山を越えて2国間に強い友情の絆ができあがったことを誇りに思うことができるのです。

蔓延する物質主義、技術主義、商業主義、消費主義の弊害から人類を守ってくれるのは、真の人間文化です。文化は人々を近づけ、仲良くさせる最高の手段です。しかし、その使命を成功させるためには、国と国、つまり先進国と途上国、大国と小国が共に同じレベルで発展し、グローバル化の時代の中であっても、様々な文化が保証されなければなりません。先進国と途上国、特にアジア諸国に顕著な大きな格差を今すぐ撤廃するべきです。私たちは、「アジアの虎」と言われるように目覚ましい発展を遂げて先進国の仲間入りをした国という良い手本に習うことが出来るはず

です。  
モンゴルと日本はどちらもアジアに属しており、伝統文化や考え方には共通の価値観、類似点が多くあります。この2国に住む私たちは、先史時代からの歴史のルーツを2冊の偉大な本から得ています。モンゴルの「元朝秘史」と日本の「日本書紀」です。どちらの本とも、国の由来を伝説の女神、モンゴルの場合はアラン・ゴア、日本は天照大神であると書いています。

モンゴルの「ツァガン・テルク(白い歴史)」という歴史をまとめた本と、日本の「17条の憲法」の中には全く同一の朝廷支配の哲学が謳われていますが、それは、仏教朝廷(国家)の「2つの力」、すなわち朝廷(国家)の力と宗教の力です。その時代にアジア全体に広がった仏教が、日本とモンゴル国を「ダルマの兄弟」つまり、仏教で結ばれた兄弟にしたのです。

最後に、私の妻、子ども、そして私から、福岡市長、財団法人よかトピア記念国際財団理事長、福岡アジア文化賞委員会の皆様、そして福岡市民の皆様に対し、この素晴らしい授賞式を開催して下さったことに心からの感謝を申し上げます。

ありがとうございました。



### \*\*\* 受賞者あいさつ \*\*\*



学術研究賞

はました なけし  
濱下 武志

このたび、大変栄誉ある福岡アジア文化賞をいただきまして、誠に光栄に存じます。

以前、福岡で博多港開港100周年を記念しましたシンポジウムに参加させていただき、博多商人の歴史的な活動について、現在にまで連なる人脈の広さを伺い、強く印象に残っております。また、釜山の韓国海洋大学校の先生からは、福岡の都市の歴史とともにあった博多港と、海洋関係とともにあった釜山港という、港の成立の根拠と背景の違いを教えていただき、海をまたいで開港都市の機能が補完し合っていることを伺い強く印象に残りました。

私は、これまで香港をネットワークセンターとして、アジアのさまざまな地域を移動しながら、誰もが共有し、共通の場としての、さらに共生の場としての海と海域について、歴史的な視点に注目しながら研究をしてまいりましたが、その中でもとりわけ開港都市の役割に注目して海と海域を研究してきました。

近年、日本の外で仕事をするが多くなり、日本を離れようと考えておりましたそのときに、今回の名誉ある賞をいただくことになりました。これは、もっと日本でしっかり仕事をするようにというご指摘をいただいたと感じておりますとともに、アジアへ向けて、福岡・九州・沖縄を中心に、アジアの地域間の研究交流のネットワークをより積極的に作ること、という大きな課題をいただいたように思います。

これからのアジア研究の課題は、人口が半数以上居住しており、ひとの移動、ものの取引、人口・環境問題の中心として、開港都市とその相互の交流がより一層重要な役割をすることになると思います。バルト海都市連合のように、東シナ海、南シナ海をまたぐ環シナ海の沿海都市連合の中で、福岡が今後一層重要な役割を果たされることと確信しております。

以上を申し上げまして、受賞のお礼とごあいさつとさせていただきます。

### \*\*\* 受賞者あいさつ \*\*\*



芸術・文化賞  
アクシ・ムフティ

2006年(第17回)福岡アジア文化賞芸術・文化賞に、私を選んでくださった福岡市と財団法人よかトピア記念国際財団、そして福岡アジア文化賞委員会に心から感謝いたします。

私は文化を専門にして、人生のほとんどを伝統文化の収集や、保存、普及に費やしてきました。大学卒業後の1972年、アジアの芸術、音楽、文学などの伝統遺産は、とても豊かで、先人の知恵や貴重な宝に溢れていることに気付きました。大学で社会哲学を専攻した私は、パキスタンのような国にとっては、文化こそが最も有効な社会発展の手段であり、また、道徳面においても真の影響を持つことができると確信しました。その時に、この貴重な遺産の保存に自分の人生を捧げることを決意したのです。

パキстанは釈迦が生きていた時代から、シルクロードによって日本との文化交流を行ってきました。パキスタンと福岡との共通点がひとつあります。アジアの最も西に位置するパキスタンが、東洋と西洋の文化の十字路であるように、アジアの最も東に位置する福岡は、アジアの玄関口であるということです。東にある福岡と、西にあるパキスタンは何世紀にも渡りアジア地域の文化交流に重要な役割を果たしてきました。今日、この東と西とが、まるで長い間離ればなれになっていた兄弟が再会したかのように、ここ福岡での授賞式の席に集い、類似した考えや共通の目標を共に分かち合うことができました。

アジアは、活力や色彩、そして文化に満ち溢れた多様な伝統が生き続ける地域として知られています。この多様性が、地域ごとの思想や文化伝統の相違の源であり、また、新たな創造性の源でもあるのです。そして何よりも、この多様性こそが、私たちが学び、誇りとし、そして守っていくべきものなのです。この貴重な遺産である多様性は、伝統に基づいた斬新な考え方や革新の中にも息づいています。これこそが、まさに福岡アジア文化賞の本当の目的なのだと思います。福岡アジア文化賞は、アジアの遺産に対して賞を贈っているのです。つまり福岡は、私に賞を与えてくれることによって、パキスタンの文化遺産、ひいては光輝くアジアの文化遺産がもつ豊かな伝統と生きる遺産に賞を与えてくれたのだと思います。

最後になりますが、私の家族を代表して、本日もご出席いただいたすべての皆様にお礼を申し上げます。福岡アジア文化賞委員会の皆様、そして、美しい街、福岡の皆様、本当にありがとうございました。



市民フォーラム

アジア文学対談

日時：9月17日(日) 13:00～15:00  
 会場：アクロス福岡 イベントホール  
 参加者：約160名 ※台風の影響による



- 1 テーマ 未来へのメッセージ～越境の文学世界から
- 2 プログラム 趣旨説明、出演者紹介 川村 湊(法政大学教授)  
 基調講演 莫 言(大賞受賞者)  
 パネルディスカッション  
 ・パネリスト 莫 言  
 津島 佑子(小説家)  
 リービ 英雄(法政大学教授)  
 ・コーディネーター 川村 湊

3 概要

基調講演で莫言氏は、創作の原点は「飢えと孤独」であると語り、小学校を中退し荒地で放牧しながら牛や鳥と話したことや、草原に寝そべって空想にふけり自然と対話していた少年時代にふれ、孤独であったが、このような経験が現在の想像力につながっていると述べた。また、創作の精神にもふれ、人間としての徳、尊厳を忘れず、生命を尊ぶことを持つことの大切さを述べた。さらに、作家は積極的に世界で起こっている全てに目を向け、人類的観点に立ち文学的手法で自分の考えを表現しなければならないと論じた。

パネルディスカッションは、川村氏の司会により進行した。津島氏は『白檀の刑』の文章表現を例に挙げ、莫言氏の作品は残酷だけど美しい、そのような表現力の豊かさ、物事をレトリックにダイナミックに転換していると紹介した。リービ氏は、莫言氏が文学とは何か、何のために書くのかという文学の根源を語ったことに感動した。また、莫言氏が言う「文化の源は民の中にある。農村にある」と論じたことに共感し、田舎に普遍的な世界性があることが見えてきたと述べた。

最後に莫言氏が、誰もが自分なりの「民の空間」を持っており、その空間の中で独特の経験をしたことが文学上の自分の貴重な拠りどころとなる。それらの独自の経験を生かすことが、他の人とは異なる文学作品を完成させる、と論じて結んだ。

フォーラム終了後、莫言氏のサイン会を行い、大勢の人が列を作った。



莫 言氏  
Mr. Mo Yan



川村 湊氏  
Professor Kawamura Minato



津島 佑子氏  
Ms. Tsushima Yuko



リービ 英雄氏  
Professor Levy Hideo



## 市民フォーラム

### モンゴルの過去・現在・未来

日時：9月16日(土) 16:00~18:30  
会場：アクロス福岡 イベントホール  
参加者：約200名



1 テーマ 民族も国境も越えて

2 プログラム 趣旨説明、出演者紹介 杉山 正明(京都大学教授)  
パネルディスカッション

第1部「チンギス・カンとモンゴル帝国」

第2部「ユーラシアの中のモンゴル、モンゴルの現状と未来」

・パネリスト シャグダリン・ビラ(学術研究賞受賞者)

刈間 文俊(東京大学教授)

木村 理子(東京大学客員助教授)

袴田 茂樹(青山学院大学教授)

森川 哲雄(九州大学教授)

吉田 順一(早稲田大学教授)

・コーディネーター 杉山 正明

### 3 概要

チンギス・カンがモンゴル帝国を創設してから今年で800周年。ビラ氏の受賞を記念したこの市民フォーラムでは、ユーラシア大陸を横断し、民族や国境を越えて存在した「モンゴル」の過去・現在・未来を、多彩なパネリストたちが壮大なスケールで語った。第1部では、「チンギス・カンとモンゴル帝国」をテーマに、京都大学文学部蔵の「混一疆理歴代国都之図」を会場に展示し、13~14世紀のモンゴルがいかに世界に対し影響を与えていたかについて語った。第2部では「ユーラシアの中のモンゴル、モンゴルの現状と未来」をテーマに、パネリストそれぞれが自身の専門分野を中心に語った。

フォーラムの途中で、モンゴル出身の白鵬関からビラ氏へのお祝いメッセージのVTRを紹介。フォーラムの最後には、モンゴルで大人気の歌手グループ「カメルトン」が、力強くかつ透明感のある歌声を披露し、フォーラムを締めくくった。



シャグダリン・ビラ氏  
Professor Shagdaryn Bira



杉山 正明氏  
Professor Sugiyama Masaaki



刈間 文俊氏  
Professor Karima Fumitoshi



木村 理子氏  
Ms. Kimura Ayako



## 市民フォーラム

### 新しい地域像を求めて

日時：9月16日(土) 13:30~15:30

会場：アクロス福岡 イベントホール

参加者：約130名



1 テーマ 海域アジアの歴史

2 プログラム 趣旨説明、出演者紹介  
基調講演  
パネルディスカッション

・パネリスト

・コーディネーター

末廣 昭(東京大学教授)

濱下 武志(学術研究賞受賞者)

濱下 武志(学術研究賞受賞者)

高良 倉吉(琉球大学教授)

服部 英雄(九州大学教授)

早瀬 晋三(大阪市立大学教授)

末廣 昭

### 3 概要

冒頭で、末廣氏が濱下氏の業績や出演者について紹介した。

基調講演において濱下氏は、歴史的にアジアが国と国ではなく、都市を中心につながっていたことについて、琉球、香港、上海のそれぞれの事例を交えて論じた。また、アジアの沿海都市のネットワークをどのようにつくっていくかが、現在及び将来の課題となっており、「今後、福岡がその経済地理的な、あるいは文化地理的な地位をどのような形でアジアに発信し、また受け止めていくかは、非常に大きな歴史的な試みとして期待されている」と締めくくった。

パネルディスカッションでは、高良氏は琉球の歴史について、海によってアジアの地域とつながりながら各地域と頻繁に交流を展開していたと解説し、早瀬氏は海域から歴史を見ることによって、今までの陸を中心とした歴史観とは違った歴史が見えてくるということ<sup>とうほう</sup>を瀬戸内地方や長崎の具体例をあげて語った。また、服部氏は中世の博多から見たアジアと日本の関係について、「唐房」という当時の中国人居留区の地名のなごりや鑄銭遺跡を手がかりに語った。

最後に、出演者全員により海域アジアに関する意見交換をおこなった。



濱下 武志氏  
Professor  
Hamashita Takeshi



末廣 昭氏  
Professor  
Suehiro Akira



高良 倉吉氏  
Professor  
Takara Kurayoshi



服部 英雄氏  
Professor  
Hattori Hideo



早瀬 晋三氏  
Professor  
Hayase Shinzo



市民フォーラム

パキスタンの美とパフォーマンス

日時：9月17日(日) 16:00~18:00  
 会場：アクロス福岡 イベントホール  
 参加者：約70名 ※台風の影響による



1 テーマ 映像によみがえる文化十字路

2 プログラム 趣旨説明、出演者紹介 藤原 恵洋(九州大学教授)  
 パネルディスカッション  
 ・パネリスト アクシ・ムフティ(学術研究賞受賞者)  
 麻田 美晴(パキスタン文化研究家)  
 小西 正捷(立教大学名誉教授)  
 ・コーディネーター 藤原 恵洋

3 概要

はじめに、ムフティ氏が制作した映像作品『サーカラマボックス』を放映した。パキスタンのほぼ中央を流れるインダス川に沿ってパキスタン全土を巡りながら、パキスタン文化のルーツを紹介するという作品に、観客の心は一気にパキスタンの魅力に引き込まれていった。

パネルディスカッションでは、まずムフティ氏が「パキスタンの文化は非常に古いにもかかわらず、その古い伝統が今でも生きている。まさに、生きた伝統文化である」と述べ、色彩豊かな資料映像とともにパキスタンの文化について詳しく紹介した。

その後、ムフティ氏がパキスタン文化の特徴としてあげた、古さ、継続性、多様性、口承伝統、統一性という5つのテーマに基づきディスカッションが行われた。小西氏は「パキスタンは、中央アジアやインドなどの大きな文化圏の中心である。そのパキスタンでは東西南北の文化がぶつかり合い、非常にダイナミックな変化を生んでいる」と、文化十字路としての地理的重要性を明言した。また、麻田氏はパキスタン文化について、「パキスタンの文化は、国という国境線だけで考えてしまうと見えてこない部分がたくさんある」とも述べた。

最後に、ムフティ氏が「日本もパキスタンも東洋の国である。東洋と西洋の違いを認識したうえで、東洋的価値観を守って行ってほしい」と述べて、締めくくりの言葉とした。



アクシ・ムフティ氏  
Dr. Uxi Mufti



藤原 恵洋氏  
Professor Fujihara Keiyo



麻田 美晴氏  
Ms. Asada Miharu



小西 正捷氏  
Professor Konishi Masatoshi



\*\*\* 学校訪問 \*\*\*  
SCHOOL VISITS

飯倉中央小学校

日時：9月15日(金) 10:45~12:15

訪問者：莫言(大賞受賞者)

生徒：5,6年生 約100名

5,6年生が大きな拍手で莫言氏を出迎えた。最初に、莫言氏の作品『白い犬とブランコ(邦題)』が原作の映画『暖』を鑑賞した。児童たちは、中国の農村風景や人々の暮らしを熱心にみていた。

続いて莫言氏が、食べ物を粗末にはしてはいけないという物語「雪と餅」を話した。その後、「私のこども時代のころ」と題して、小学校を中退し、鳥や牛に話しかけていたことなどの話をする、児童たちは興味深く聞き入っていた。莫言氏は「時代が違って、人や自然を愛し敬うことが大切」と語った。その後、児童から「莫言先生は、こどもが好きですか」と聞かれ、莫言氏から「皆さんが一番」との答えが返ると、大きな拍手が会場を包んだ。

Ikura Chuo Elementary School

Date & Time: 10:45 - 12:15  
Friday, September 15, 2006

Visitor: Mr. Mo Yan, Grand Prize Laureate

Students: Approximately 100 fifth and sixth graders

The fifth and sixth graders welcomed Mr. Mo Yan with a loud applause. First, they watched "Nuan," a movie based on Mr. Mo Yan's work, *The White Dog and Swing*. The children stared intently at the scenes of rural areas and people's daily lives in China projected on the screen.

Mr. Mo Yan then told children a story of "Snow and Rice Cake," in which the importance of cherishing food was taught. His next story was about his childhood of how he forced to drop out of primary school, how he spoke to birds and cows, while the students listened intently. Mr. Mo Yan commented how important it is to love and respect one another and nature irrespective of the era we are in.

Asked if he likes children, Mr. Mo Yan replied "You are the best!" which caused a shower of applause.





## 学校訪問 SCHOOL VISITS

### 南片江小学校

日時：9月15日(金) 11:30～13:00

訪問者：シャグダリン・ビラ(学術研究賞受賞者)

生徒：1～4年生 約360名

PTAの方々手作りしたモンゴルの国旗を振って、また児童たちはきれいな花でつくったアーチを持って、ビラ氏を温かく出迎えた。

1年生から4年生までの児童たちが参加した授業では、ビラ氏がオルティンドーというモンゴルの歌や、モンゴルの伝統住居「ゲル」や馬に乗った子どもたちの写真を紹介し、児童たちは興味深そうに説明を聞いていた。

また、歴史学者のビラ氏は、「歴史というのは、国のことだけでなく、ひとりひとりにあるものです。皆さんもこれから自分の歴史をしっかりとつくって欲しいと思います」と児童たちに語りかけた。

授業終了後、4年生の教室で、給食を一緒に食べ、楽しい一日を過ごした。

### Minami Katae Elementary School

**Date & Time:** 11:30 - 13:00  
Friday, September 15, 2006

**Visitor:** Professor Shagdaryn Bira, Academic Prize Laureate

**Students:** Approximately 360 first to fourth grade pupils

Parents with Mongolian national flags and children holding arches of handmade paper flowers warmly welcomed Professor Bira.

At the program participated by the first to fourth graders, Professor Bira first let the children listen to a Mongolian song of Urtyn duu and see photos of Gel, a Mongolian house, and children on horses. Students turned sympathetic ears to his talk.

Being a historian, Professor Bira spoke to the children. "History relates to its country as well as an individual living in the country. I hope each of you will make your own history firmly and solidly."

The laureate enjoyed eating lunch with fourth graders in their classroom before leaving the school. It was indeed a pleasant day for the laureate and the children.





\*\*\* 学校訪問 \*\*\*  
SCHOOL VISITS

筑紫丘高等学校

日 時：9月15日(金) 16:00～17:00

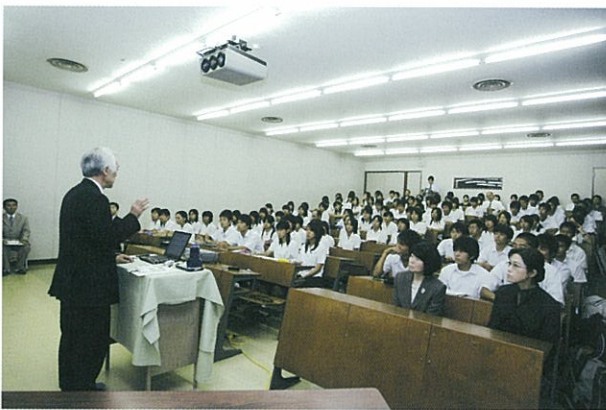
訪問者：濱下 武志(学術研究賞受賞者)

生 徒：1～3年生 約130名

濱下氏が、1～3年生の生徒を前に、「華人とムスリムの出会いと交わり:タイ南部の林姑娘<sup>リン・クワンニャン</sup>伝説」という演題で講演を行った。氏のこれまでの研究やアジア各地での豊富な体験に基づいて、「文化の共存とネットワーク」「文化の多様性と多面性」「沿海都市のネットワーク」「アジアの中の福岡の役割」等について、氏が撮影したアジア各地の写真を示しながら、高校生に分かり易く話した。

講演終了後は生徒から、アジアの文化や経済について熱心な質問が相次いだ。

次代を担う高校生にとって、アジアの文化や歴史に目を向けるたいへん有意義な機会となった。



Chikushigaoka High School

**Date & Time:** 16:00 - 17:00  
Friday, September 15, 2006

**Visitor:** Professor Hamashita Takeshi,  
Academic Prize Laureate

**Students:** Approximately 130 first to third  
grade students

Professor Hamashita picked the topic, ‘Encounter and interactions between Chinese descent and Muslim—Legend of The Lady Linshui in the southern Thailand,’ to lecture in front of first to third year students. Based on his years of research and rich field work in Asian countries, Professor Hamashita spoke comprehensibly of the ‘cultural symbiosis and networking,’ ‘cultural diversity and many faces the culture has,’ ‘coastal cities networks,’ and ‘the role Fukuoka plays in Asia,’ using photos he took in various parts of Asia.

Following his talk, many students ardently asked him various questions one after another about the culture and economy of Asia.

The lecture gave a very important and rare opportunity to the students who will be the leaders of the next generation to turn their eyes to the history and culture of Asia.





## 学校訪問 SCHOOL VISITS

### 城南小学校

日時：9月15日(金) 10:45～11:35

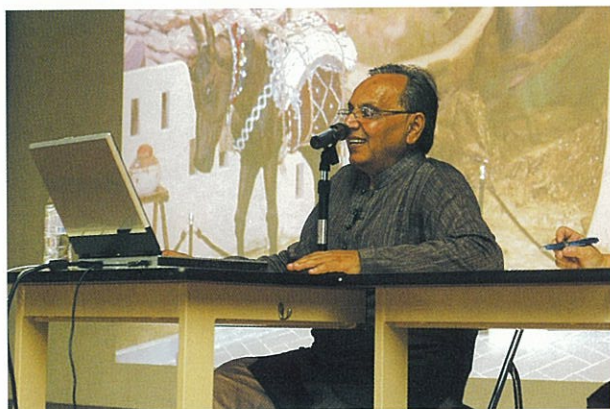
訪問者：アクシ・ムフティ(芸術・文化賞受賞者)

生徒：1～6年生 約780名

会場となった体育館では、6年生が一生懸命に練習したパキスタン国歌の演奏と、全校児童の温かい拍手でムフティ氏を歓迎した。

ムフティ氏は、この日のために用意したというパキスタンの貴重な文化遺産の映像を使用しながら、「パキスタンの文化は何千年も前から受け継がれており、今でも人々の生活の中に生き続けている」と説明し、豊かで多様なパキスタン文化の魅力を子どもたちに紹介した。次々と現れる色彩豊かな映像に、会場からは大きな歓声がわき上がった。

講演終了後も、ムフティ氏は児童たちから握手を求められたり、一緒に記念撮影をしたりと、児童にとっても、そしてムフティ氏にとっても、楽しい文化交流の一日となった。



### Jonan Elementary School

**Date & Time:** 10:45 - 11:35  
Friday, September 15, 2006

**Visitor:** Dr. Uxi Mufti, Arts and Culture Prize Laureate

**Students:** Approximately 780 first to sixth grade graders

The gymnasium was turned to a venue for welcoming Dr. Uxi Mufti, with music performance of Pakistani national anthem played by the sixth graders and a warm applause by the whole children.

Dr. Mufti showed children images depicting precious Pakistani cultural heritage he prepared solely for this program. He told them that the culture in Pakistan has been inherited for over thousands of years and still live in people's daily lives even now, thus introducing the charm of Pakistani culture. The floor reacted with a great cheer each time a brilliant and colorful image appeared.

Even after his lecture, Dr. Mufti was offered to shake hands and to join in commemorative photos with the children. It was the day of special cultural exchange for both the children and the laureate.

